

総合文化研究所 Workshop Series 第七回

フィリップ・マインレンダーの芸術論…詩的リアリズムとの親近性

報告 永盛鷹司

報告者の研究対象であるフィリップ・マインレンダー（一八四一—一八七六）は、現在では専らショーペンハウアーの哲学を継承した哲学者として知られている。しかしながら、その執筆活動の出発点が詩作にあり、哲学書だけではなく文学作品も残していること、社会主義に関心を抱いていたことなどから、たんにショーペンハウアーの思想的継承者という枠組みではその思想の全体像をとらえることはできない。報告者の関心は、従来とは異なる枠組みにおいて、とりわけ同時代の文学・詩学の議論との影響関係を軸に、マインレンダーを思想史・文学史の新たなコンテクストに位置づけることにある。

この目的のための出発点として本発表では、マインレンダーの芸術論におけるリアリズムの概念に着目した。マインレンダーの芸術観と、同時代、つまり十九世紀後半のドイツの文壇において一大潮流であった「詩的リアリズム」の芸術観に類似性があることは先行研究でも指摘されているが、詳細な比較検討は行われていない。そこで本発表では、「リアリズム」という概念がそれぞれにおいてどのように位置づけられているか、大枠の整理を行った。

マインレンダーと「詩的リアリズム」は、芸術は世界の反映でなければならぬが同時に芸術家の手による理想化・美

化の契機も不可欠であるという、芸術一般の大前提を共有している。マインレンダーはそこから、芸術を「理想的芸術 (die ideale Kunst)」と「リアリズム的芸術 (die realistische Kunst)」に大別する。前者は意志と精神が調和した「美しい魂」を告示するものであるのに対して、後者は人間の葛藤や闘争を描き出すものである。これに対してオットー・ルートヴィヒ（一八一三—一八六五）を筆頭にする「詩的リアリズム」の理論家たちは、先述の前提そのものを「リアリズム」という言葉で表している。「リアリズム」とは、世界を忠実にコピーするだけの「自然主義」と、現実世界とつながりのない「理想主義」という、批判されるべき二つの芸術の中間にある、目指すべき芸術のあり方という位置づけである。

このことから、世界の反映と芸術家による美化の両方の契機を必要とするという大枠の芸術観については、マインレンダーはきわめて同時代的であったといえる。しかし、「リアリズム」という概念の定義については、同時代のリアリズム文学の理論家たちとは異なっていたことがわかる。マインレンダーの「リアリズム」概念については今後、理論の側面と合わせて、かれの実際の文学作品の分析も取り入れながら、さらに厳密に論じていく必要がある。

発表日 二〇一八年十二月十二日 (水)